

台湾原住民セデック族の文化変容とアイデンティティー —西部タックダヤ語群を中心に—

神奈川大学大学院

歴史民俗資料学研究科 歴史民俗資料学専攻 博士後期課程

李干

論文要約

台湾原住民セデック (Seediq) 族とは、首狩りを行い、台湾中央山脈の中部を中心として暮らしてきた原住民族である。セデック族は「人間の肉体は死んでも、靈魂は滅びない」と信じており、「UTUX」(祖靈、靈魂)文化を崇め、出草(首狩り)、文面(顔面入れ墨)、狩猟採集、農業と人間関係などを制約するエスニックなルール「GAYA」(セデック族の文化、律法、社会規範と祖先の教え)を守ってきた。現在の人口は、約10000人と推定されており、全台湾人口の0.04パーセント程度で少数である。周辺地区のタイヤル族、タロコ族と似ている文化を持っている。地理的には、台湾中央山脈を境に、西部セデック群と東部セデック群に分かれている。東部セデック群は、西部セデック群の移民により構成される。セデック族の中にタックダヤ(Tgdaya)、タウツァ(Toda)トロック(Truku)という3つの語群(方言グループ)があり、その中でも特に台湾東部の花蓮地区に移住した東部セデック群(主にトロック語群)は2004年1月14日にタロコ族として独立民族になった。日本統治時代にはタイヤル族の支族とされ、その分類は、戦後も引き継がれたが、2008年4月23日に台湾政府より独自の民族として認められ、台湾における14番目の原住民族となったのである。日本統治時代の1930年10月27日に台湾の台中州能高郡(現在の南投県仁愛郷)霧社で起こったセデック族西部タックダヤ語群のMehebu社の頭目Mona Rudoを中心とした日本統治時代後期における最大規模の武装蜂起事件—霧社事件により世の中の人々の関心を集めている。

本論文では西部タックダヤ語群を中心に、セデック族の文化とアイデンティティー、そして特有の死生観、世界観と価値観が時代の流れとともにどのように変容してきたかに焦点をあて考察を行った。日本統治時代から禁止されていた、セデック族にとって通過儀礼のような存在である出草、文面などの現代社会の価値観に悖る風習と文化がどのように変化し、今現在は台湾社会でどのような形で存在しているか、そして外来信仰としての基督教が「UTUX」の靈魂観を持つセデック族においてどのように変容していったか。また、台湾政府より合法的な独立民族として認められる「正名運動」の経緯と現代社会に存在する社会問題、さらにセデック族をモチーフにした映画、音楽のような大衆文化作品に対して考察を試みた。アイデンティティーというものは流動的で、1人の人のアイデンティティーは1つだけではなく、複数の帰属先があるという視点から、セデック族の文化と民族アイデンティティーの「喪失—再確立」という変容過程を論じた。

研究方法とその視点に関して、本論は文献研究、実地調査、聞き取り調査と関連文化作品の研究を通じ、中国大陸と台湾の中国語文献、外国語文献の中国語訳版、日本の日本語文献、外国語文献の日本語訳版を中心に、多元的な視点から文献研究を行い、部落での実地調査とセデック族への聞き取り調査、そしてセデック族をモチーフにした映画、ドキュメンタリー、音楽など様々な形の文化作品を研究し、多角的にセデック族を研究することを試みた。主な聞き取り調査対象はセデック族抗日部族後裔である郭明正氏(族名:Dakis Pawan)、Mehebu社頭目Mona Rudoの曾孫娘であるMaho Pawan氏(漢名:張淑珍)と清流部落諸セデック人となっている。調査地に関しては、主にセデック族西部タックダヤ語群抗日6社の現住所である清流部落を中心に、霧社事件の発生地で、西部タックダヤ語群の

元住所である霧社地区、タイヤル族烏來部落と映画『セデック・バレ』の撮影地で、タロコ族の一部の部落が位置する太魯閣國家公園でも調査を行った。

本論は「序章」、「終章」と5つの章、合計7つの部分で構成される。「序章」の部分では研究背景と問題の所在、研究目的、先行研究、研究の視点と方法、調査地の選定、概況と論文構成をそれぞれに紹介した。

第一章ではセデック族の民族識別問題を中心に、広く台湾原住民全体の正名運動の経緯から台湾社会における台湾原住民の民族識別問題を鳥瞰し、清朝期、日本統治時期と戦後期という3つ時期に分けており、異なる時期、異なる研究者・研究機構、異なる視点と基準によりセデック族をどのような形態で分類・識別してきたことに対して系統的に考察を試みた。特に日本統治時代の台湾原住民分類法におけるセデック族の分類史を中心に、かつてタイヤル族の支族として取り扱われた部分を重点的に考察した。タイヤル族とセデック族の言語、自称用語、「石生」、「木生」の起源伝説などの文化の相違点によりアイデンティティーの違いを論じ、セデック族、タイヤル族、タロコ族の関係を再検討した。そして、セデック族の起源伝説に関して、特に近年におけるセデック族老人の口述伝説と過去のものに合わせて考察を行った。また、セデック族民族認定が成功した以降の諸社会問題に着目し、セデック族の自称用語により生じた民族名称選定問題、エスニックな姓名制度により生じた伝統姓名登録問題と伝統姓名表記問題、特に、伝統姓名登録、表記と族別登録の現状とその原因の考察を試みた。伝統領域問題に関して、本研究では、セデック族タックダヤ語群の視点から、台湾原住民保留地、伝統領域とその変遷に着目し、伝統領域、原住民領域（居住地と原住民保留地）と文化領域という概念に対して定義を試みた。そして、セデック族伝統領域とセデック族の歴史記憶、生存利益、民族アイデンティティーなどの関係性を考察し、さらにこれらの問題に対する具体的な対策を提案してみた。

第二章では、聞き取り調査と日本統治時代の『蕃族調査研究報告書』を中心とされる文献調査を基に、セデック族の出草の風習を再発見・再検討してみた。セデック族の出草風習の「豊穰をもたらす、悪疫の流行を払う」、「防御、領域の完備性を守る」、「成人式」と「矛盾の解決手段」という4つの主な目的を中心に、出草の理由と目的を考察した。セデック族タックダヤ語群の出草風習の起源伝説を中心に各語群のを比較し、そして今現在の口述記録と比較分析を行った。出草の対象の選択基準からセデック族を「社群」、「部落」を単位とした群体意識、「首」そのものの機能性と霊力、関連の道具と出草の実行における「夢占い」、「鳥占い」という先決条件、「首」に対する処分の方法、成功と失敗の場合それぞれの流れと関連のタブーに対して考察した。よって、出草の風習はセデック族男性に対する重要な意義を持ち、セデック族にとって単なる殺人行為ではなく、部落の関係を調和する、秩序を維持する重要な手段であると論じた。また、出草の風習に含まれる伝統的な観念が、ほかの形へ転化していくことに対しても考察を試みた。

第三章では、まず、セデック族の伝統的な文面の条件や施行の流れ、タブー、器具を系統的にまとめる。次に、セデック族の文面の起源伝説に対する分析を行った。そして、タイヤル族やタロコ族の文面紋様との比較研究を行った。また、清流部落を調査地として、セデック族の文面文化の復興現状とセデック人の態度、特に文面の復興に対して批判的態度をもつセデック人の考えや意識を明らかにした。最後に、伝統的な部落時代における文面の意義とその変容に対しても考察を試みた。

第四章では広くセデック族の宇宙観と生死観から入り、教義が確立された「世界宗教」と異なるセデック族の「UTUX」という靈魂観とエスニックなルール「GAYA」に注目した。「UTUX」という概念の「靈魂」、「鬼魂」、「祖霊」、「万物を編む創造神」などの多重の意味、「UTUX」の善と悪、セデック語における「UTUX」という単語の複雑な性質を考察した。清

流部落を主な調査地として、「UTUX」の靈魂觀をもち、「GAYA」を守ってきたセデック族が、どのように基督教（プロテスタント）を受け入れたのかという問題を取り上げた。具体的には、まずセデック族部落における基督教の伝道史と、長老教会の設立・発展を振り返えた。次に、井上伊之助の台湾原住民医療伝道の中で指摘した基督教の教会集団原理と、タイヤル族・セデック族の「GAGA」および「GAYA」集団原理の共通性を検討した。最後に、セデック族の靈魂觀と基督教の教義の比較分析を試みた。

第五章ではセデック族文化を芸術的な処理手段を通じて一般人にも興味を持たせ、理解させる、いわゆる大衆文化化ことを論じた。主にセデック族タックダヤ語群の霧社事件をモチーフにした映画作品『セデック・バレ』と、台湾のロックバンド「ソニック」のアルバム「セイディク・バレイ三部作」のような大衆文化作品に注目した。映画『セデック・バレ』と実際の霧社事件との異同を比較し、霧社事件から見えるセデック族の「GAYA」とイデオロギーを解説し、芸術的な角度から映画の全体を分析し、そして『餘生-セデック・バレの真実』という映画のドキュメンタリーも取り上げた。ソニックの「セイディク・バレイ」三部作の部分では、作品も叙事性と音楽表現を総合的に考察し、すなわち、各アルバムの各曲はどんな歴史を述べているのか、そして、歴史をどのような音楽的な手段で表現していることに対して考察を行った。また、こうしたセデック族に関する大衆文化作品の現状、そして、これらの大衆文化作品に対する考察を通じて、セデック族文化を一般人にも興味をもたせ、理解させる文化、いわゆる人を引き付ける特徴のある大衆文化で表現することの利害関係を検討してみた。

終章の部分では、前五章の考察を合わせて、民俗・文化とアイデンティティーの関係に対する検討を通じて、セデック族は伝統的な部落時代から現在までのアイデンティティーの形成、確立、喪失、再確立の変容過程を考察した。今後の研究課題として、各章において内容の不足を補いながら、本論で考察されなかったセデック族の狩猟採集文化、民具、建築物、歌と舞踊に対して考察する予定。また、日本及び台湾以外の先行研究に対する調査が不十分であり、継続的な課題としたい。

付録として、2016年11月、2017年11月と2019年8月に筆者は清流部落で郭明正氏に3回聞き取り調査内容の日本語訳版、セデック族「合成詞」構成規律、清流部落年表（-2014）と台湾原住民関係略年表（-1997）を収録した。

キーワード：台湾原住民、セデック族、アイデンティティー、霧社事件、首狩り、出草、入れ墨